

報道関係機関と地球研との懇談会（2015年3月12日 於京都烏丸コンベンションホール）

「歴史はおもしろい！」をたくさんの人と共有するために
—歴史学研究者が今取り組むべきこと—

鎌谷かおる
（気候適応史プロジェクト・プロジェクト研究員）

自己紹介

【専門】 歴史学（日本近世史）

【フィールド】 滋賀県

【研究内容】

- ・生業史研究

日本近世近代の内水面漁業の研究
（漁業権／漁業技術／漁業社会構造）

- ・地域史研究

日本の「村」の総合的研究
（江戸時代から現在までの地域社会のあり方について）

→人と人・地域と地域のつながり・「今」につながる過去の歴史

今日の内容

「歴史学研究者が今取り組むべきこと」について自身の研究活動を事例で紹介

「地域にまなぶ」研究の実践

「村の日記」研究会の活動 2005年～

- ◎ 歴史学・民俗学・社会学の研究者
- ◎ 総合的に「村」を研究
- ◎ 区・教育委員会との連携

※ 主な調査内容

古文書調査（区有・個人所有・寺院・講）／年中行事調査（村・家・寺社）
蔵調査（民具・古文書）／聞き取り調査／古写真の収集

◎ 特色

地域の人々と調査成果を共有

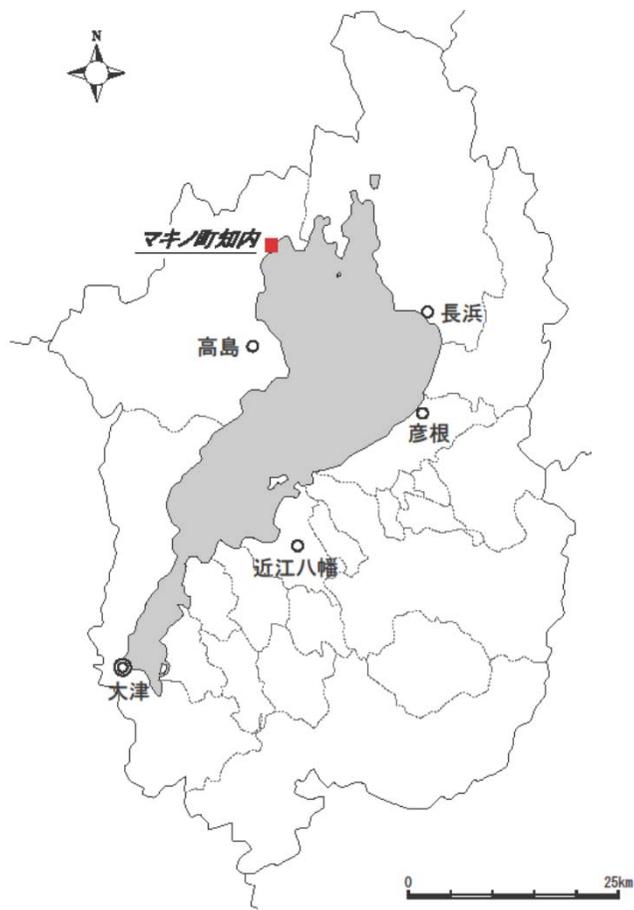
→ 成果報告会／漁業体験会／文化祭展示／「記録」を読む会（勉強会）

期限を決めない長期的な調査

「生活」しながら研究するという方法の実践 → 知内研究所の設置

☆ 「地域」をまなぶ・「地域」とまなぶ・「地域」でまなぶ

※ 研究成果を地域へ還元 → そこで得られる情報が再び研究に活かされる
「ともにまなぶ」意味・意義／研究者とフィールドの関係



高島・知内 江戸中期から出来事記す

「村日記」読み解き1年

高島市マキノ町知内区の歴代区長が連綿と書き続けている「村日記」を、研究者と一緒に読み解く住民の勉強会が毎月開かれ、昨年末で満1年を迎えた。100年前のまちづくりが今に生きていることが分かり、住民に好評だ。



知内に伝わる「村日記」を読み解くため、毎月第3土曜夜に開かれている勉強会(高島市マキノ町・知内会館)

知内の村日記は、江戸中期の1745(延享2)年から、庄屋や区長が地域の出来事や行事を記している。「村の日記」研究会(代表・古川彰関西学院大教授、5人)が、地域の空き家に研究拠点を置いて寝泊まりし、資料を基に歴史や民俗の調査を続ける。

勉強会は「知内の歴史を読む会」と題し、2010年12月から毎月第3土曜夜に知内会館で開いている。1912(明治45)年の資料から読み始めた。毎回、約20人が参加する。

勉強会では、村日記を全員で声に出して読み、

住民と研究者ら まちづくり 生きる

研究者が今の言葉に訳し、住民に今の地域や習慣との関係を問う。橋本九一郎さん(85)ら昔に詳しい住民が説明を加える。

16(大正5)年まで読み進めた。汽船会社に知内への寄港を陳情したことや、知内川の工事費を地元で工面した様子を学んだ。当時の消防ポンプが今もあることや、神社にある青年らの「一字書」奉納が、大正天皇即位の祭典でも行われていたことが分かった。

中川徳司区長(70)は「今の地域、生活が、先人たちの大変な努力で成り立っていることが分かる」という。研究者の鎌谷かおる神戸女子大講師(36)は「村日記を書き、伝えてきた地元の人々が、あらためて掘り起こし共有する機会になっているのでは」と話す。

(石崎立矢)

たくさんの人と「歴史のおもしろさ」を共有するために

①研究成果の発信

・研究成果の発信の方法 = 論文・著書・講演会・ワークショップ等

※その多くは研究者向け／研究者としては必要

・「研究者が知りたいこと」と「たくさんの人が知りたいこと」

※知っていることをどのように共有するかが重要

→現地報告会の実施

昔と今をつなぐ取り組み

②古文書講座の実施

・「よき歴史の理解者」の発掘

・「歴史のおもしろさ」を共有

③市民講座の実施

「伝えることで得られること」



「得られることから伝えることへ」



研究成果現地報告会（2015年3月8日於大津市）

まとめ

歴史学 = 目に見えて何かに役立つという学問ではない
過去を知ることによって今の自分を知ることができる「心の豊かさ」につながる学問

※「歴史」は歴史学研究者だけのものではない

→ たくさんの人と「歴史のおもしろさ」を共有する努力が必要

本当の意味での研究の「地域還元」とは？

歴史学の必要性を考える機会（学問としての危機とチャンス）

方法：地域にまなぶ研究／研究成果の発信／古文書講座の実施／講演活動

「過去から何をまなび、何が今につながり、何を未来につなげるのか」

それを考えるきっかけ作り = 歴史学研究者の役割